

サイバースペースにおける新しい友人関係の可能性 Possibility of new friendship on cyberspace

俵木裕毅*
Yuki HYOKI

*明治大学 情報コミュニケーション学部
School of Information and Communication, Meiji University

あらまし：インターネットの普及によって誕生したサイバースペースについて、そこでのコミュニケーションはリアルスペースの場合とは異なり、対面の必要がない。そのことは時間や空間の制約を緩和するだけでなく、秘匿的なコミュニケーションを行うことも可能にした。本稿では、リアルスペースで知り合った友人とのサイバースペースにおけるコミュニケーションについて、秘匿性をふまえながら考察し、それによって、いわゆるネット友達やリアル友達とは異なる、新しい友人関係について考えていく必要があることを示した。

キーワード：サイバースペース、リアルスペース、コミュニケーション、インスタントメッセージャー、秘匿

1 はじめに

インターネットの普及によって誕生したサイバースペース（以下、CS）はリアルスペース（以下、RS）にはない特徴を持っている。例えば、いわゆる「ネット友達」と顔の見えない「匿名」的なコミュニケーションを、第三者に「秘匿」的に行うことが可能である。

なお、このような特徴はRSで知り合った友人に対しても可能であり、本稿はそれによる可能性を述べる。

2 友人関係の分類

CS及びRSでの友人関係について、CSとRSをそれぞれタテ軸、ヨコ軸とし、正を「知っている」、負を「知らない」にして4つの象限に分け、さらに表1の通りに分類した。そのうち、I、IIをそれぞれ「友人関係I」、「友人関係II」とする。

表1 友人関係の分類（丸囲み数字は各象限を表す）

①	I: CSでも、RSでもコミュニケーションを行う友達 II: RSではコミュニケーションを行わないが、CSではコミュニケーションを行う友達
②	III: RSではコミュニケーションを行わないが、CSではコミュニケーションを行う友達
③	IV: CSでも、RSでもコミュニケーションを行わない他人
④	V: RSではコミュニケーションを行うが、CSではコミュニケーションを行わない友達

3 友人とのCSでのコミュニケーション

3.1 現状

RSで知り合った友人とのCSでのコミュニケーションについて、筆者は2005年10月に明治大学情報コミュニケーション学部の学生に対して、以下のようなアンケートを行った（有効回答数80）。

(1) CSでコミュニケーションを行う「リアル友達」がいるか。（この質問のみ「CSでのコミュニケーションが携帯電話のメールのみである場合」は除く。）

(2) 「RSで知っており、会って話をする機会があるはずなのに、RSでは話さず、CSでのみ話をする友人」がいるか。例えば、「同じクラスなのに、そこで話すことはなく、メールやインスタントメッセージャー等でのみ話す」等の場合がこれに当てはまる。

結果は表2の通りとなり、携帯電話のメールのみの場合を除いた「友人関係I」を持つ者は3割程存在し、「友人関係II」に相当する者は1割程だが存在する。

表2 CSでのコミュニケーションの現状

	(1)	(2)
はい	29	9
いいえ	46	69
無回答	5	2
合計	80	80

3.2 新しい友人関係の可能性

CSでの友人間のコミュニケーションでは、メール、

BBS、チャット、インスタントメッセージ（以下、メッセージ）、ブログ等が用いられる。そのうちメッセージでは、リストに登録した者のみによって、「会話」形式のコミュニケーションがなされる。そのため、第三者の参加可能性は低く、秘匿が可能となる。

しかし、「友人関係Ⅰ」の場合、RSでのコミュニケーションも行うため、人間関係の他者への秘匿は不可能であり、CSでの秘匿的なコミュニケーションを行ったとしても、秘匿性は不十分なものとなる。そこで、「なかなか会いづらい人（例えば、異なるジェンダーの場合）」等のように、他者に「知られない（知られたくない）」関係に関して、それが可能である「友人関係Ⅱ」について考察を行っていく必要がある。

また、この友人関係はCSとRSを結ぶようなものであるという特徴も持つ。これらの可能性や特徴を持つものを考えるに当たり、「リアル友達」や「ネット友達」、あるいは「友人関係Ⅱ」といった表現ではその位置づけを表すことが難しい。そこで本稿は、その関係を、CSとRSを結ぶ「中間」、つまり"middle（ミドル）"に位置するものとして、「ミドル友達」と名付ける。

4 ミドル友達とのコミュニケーション

4.1 RSでのコミュニケーション

ミドル友達とのコミュニケーションはCSで行われるものの、二者が知り合うのはRSであるため、その際に、限定的ではあるがRSでのコミュニケーションが存在する。例えば、話しかける際の言語コミュニケーションや、顔を見ることで相手の風貌等を知覚する際の非言語コミュニケーションが挙げられる。ただ、これらによる情報は極めて限られるため、CSでのコミュニケーションに関する考察が重要となる。

4.2 メッセージを用いたコミュニケーション

ミドル友達とのコミュニケーションにおいて、メッセージは重要なツールである。本節では、そのメッセージでのコミュニケーションの特徴について、匿名ゆえの非言語コミュニケーションの制限(特徴①)と、タイピングにおけるタイムロス(特徴②)の二つに焦点を当てる。これらはネガティブなイメージを喚起するかもしれないが、一方でそれらが持つポジティブな視点にこそ、注目すべき点が存在する。

特徴①について、発言に対して相手がいかなる表情

をするかを知ることができないことがある。しかし、このことが完全に起こるのは、RSで相手の顔や表情を見たことがないようなネット友達の場合においてのみであろう。一方、ミドル友達の場合はRSで知っている者であるため、相手のRSでの顔を知っており、それを前提としたコミュニケーションが可能である。それゆえ、相手がいかなる表情をするであろうか、十分ではないものの想像可能であり、制約が緩和される。

ただ、これではRSでのコミュニケーションの「制限版」とでもいえるものに尽きてしまう可能性がある。従って、完全な匿名でないゆえに存在する利点を考える必要がある。そこで、特徴②が挙げられる。

タイピングによる会話の場合、発話の場合と比べて一定時間に伝えられる文字数が減ってしまう可能性が高い。さらに、タイピングによる過大なタイムロスは会話の不成立を引き起こす可能性もある。

しかし、その会話は「口頭」ではなく、「書き言葉」としての性質も含んだものによってなされている。そのため、過大なタイムロスは避けるべきものの、メッセージについて「黙読」という形式で、自己の世界に浸って、相手が表情を持った存在と考えずに深く考察することができる。また、自己のタイピングによるタイムロスに対して、相手が怪訝な表情をするのを（想像は可能ではあるが）見ずに済むこともできる。

従って、想像による非言語コミュニケーションが可能な上に、匿名によるメリットも存在する点で、ミドル友達間のメッセージでのコミュニケーションはRSでのコミュニケーションの単なる「制限版」とはならないのである。

5 まとめ

本稿では、新しい友人関係の可能性を「秘匿」と「匿名」に焦点を当てて述べた。ただ、他の友人関係との関係性や、ミドル友達に対する対面の希望、また情報科学との関わり等、不十分な点もまだ残っている。それらは、今後の研究の課題として取り組んでいきたい。

なお、最後になりましたが、アンケート実施の際に貴重な時間を割いていただいた、明治大学情報コミュニケーション学部助教授の大黒岳彦氏ならびに同学部兼任講師の廣澤晃一氏に深く感謝いたします。